発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話(53)3033番
(53)3034
編集兼発行人　前川哲也
半年間1,200円　送料共

炭労、期末手当闘争を妥結

また低額回答押しつけ

口実は「赤字」、現場は増産

炭労の「五十四年度下期期末闘争」は、十一月二十六日、経営側が示した最終回答をうけいれることをきめ、妥結した。回答は三十三万八千円にプラスアルファーで要求におよばず、またしても低額回答でおさえられる結果となった。「経営上の赤字」「貯炭」「金融事情の悪化」など経営側があげる理由を真にうける者はいず、残った不満は大きい。

一番方の払いが終るのが、午後三時から三時半ごろ。ゲート・パンツアコンベアーのスライド作業は、それから始まる。機械工、電気工は、当然残業に追い込まれていく。電気工の場合、スライドの前にほかの作業を指示されることが多いので、スライドが終るまでキリキリ舞いさせられる。それでも、出来高が多くなることはなく、残業できたわれた分は残業手当のみ、という不合理な賃金となる。喜んで残業する人は一人もいない。交代時間作業だから仕方ない、強制された残業なのだ。

進軍ラッパにこたえて、係員は満足そうに笑っているが、働くわれわれはつらい。

人員増をはかれ

どの職種も、人員不足である。電気も例外ではない。人員不足からくる終掘箇所の回収のおくれ、各片盤の保線の乱れはなはだしい。

坑底に鳴りひびく

増産進軍ラッパ

――三池炭鉱に見る現実

炭鉱経営側は、昭和五十四年度の下期期末手当で低額回答を押しける口実に、またも「経営赤字」「貯炭」「金融事情悪化」などを並べたてた。

ところが、三池炭鉱の現実ははたしてどうか。増産、増産の督励で、採炭を中心とする坑内労働者から悲鳴があがりかけている。

坑内の現実を、三川指導部電気分会の新聞〝交流〟（十一月二十七日発行のNO・六〇）は、その一面で次のように述べている。

×

赤字、赤字、赤字

三川鉱上期の減産分、十六万八千トンを取り返せ、と保安教育の席上、鉱長は高らかに進軍ラッパを吹き鳴らした。

その甲斐あってか、連日一万トンからの出炭が続いている。

今年夏の期末手当要求に対して会社は、一トン当たり七百円の赤字だから、期末手当はかんべんしてくれ、といった。

こんどは、上期二十三万トンの減産だから、二十六億円の赤字になったという。だから、これを取りもどすための進軍ラッパだ。

掘れば「赤字」。掘られば「赤字」。このからくりは、いったいぜんたいどうなっているの。

出来高はさっぱり

出炭に追いまくられ、採炭工の残業は常態となった。

ついに回答ひき出す

遺族の闘いひとまず終る

不満足なものではあったが、三つの要求をつらぬくために団結し、座りこみなどを中心にすすめてきた遺族の闘いは終った。（下の写真は、三川鉱前の座り込み）

最後のヤマ場では、遺族自身が縫製の両誘致工場正門前の三カ所の闘いは、最初は「両工場に働く三川鉱正門前、アソニットと三池での座りこみにまで発展した遺族遺族が退職する場合、三池鉱業所なみの退職金を補償せよ」など、三つの要求を三井鉱山につきつけることではじまった。

要求の正しさに理解を求めるための、職場ごとの三池労組員との交流を広げ、両工場それぞれに団結するための意志統一集会などを積み重ね、三池労組の指導のもとに上京団を編成（十人）し、中央交渉もすすめた。その努力がゼロ回答をハネ返す力となった。

炭労

増産へ進軍ラッパ

―赤字のからくりこれいかに―

三川鉱上期の減産分16万8千トンを取り返せと、係員数百の前に、鉱長は高らかに進軍ラッパを吹き鳴らした。

その甲斐あってか、連日一万トンからの出炭が続いている。今年夏の期末手当要求に対して会社は一トン当り七百円の赤字だから、二十六億の赤字になったという。だからこれを取りもどすための進軍ラッパとなったのだ。掘れば赤字、掘られば赤字。このからくりは一体どうなっているの。

残業はイヤだ

出炭に追いまくられ、採炭工の残業時間が多くなったのは三月から三時半頃、ゲートPCのスライド作業はそれから始まるので、機械工・電気工は当然に残業に追い込まれる。

電気の場合、スライドの前に他の作業を指示される場合が多いので、スライドが終わるまでキリキリ舞いさせられ、そして出来高が多くなることもなく、残業できたわれた分は残業時間手当のみという不合理な賃金となる。

喜んで残業する人は一人もいない。交代時間作業だから仕方なく、強制された残業なのだ。進軍ラッパにこたえて係員は満足そうに笑っているが、働くわれわれはつらい。

閻が足らん

どの職種も人員不足である。電気も例外ではなく、人員不足からくる終掘箇所の回収のおくれ、各片盤の保線の乱れはなはだしい。さらに定年退職者が続く。その人達はベテランばかりで、その欠員を補充したら同じ位の人員というのではない。早急に補充工の増員を計るべきだ。

上の職場新聞は、三川指導部電気分会発行の〝交流〟一面。職場の現実がいきいきと伝わってくる。裏面に「遺族問題」の記事や、物価動向への不安を訴える手記など掲げ、根は職場に広がった。

No 60
1979
11-27
三池労組三川電気分会

裁判公判日程

大災害裁判公判　二月十三日午後一時、福岡地裁で。遺族の証言が続く。

九・二八　坑内火災裁判公判　今のところ未定。

上村裁判公判　来年の三月二十六日、福岡高裁で判決い渡し。会社のあがきをさらけ出した、ひきのばし策もついに粉砕していよいよ判決へ。ただし、和解勧告が出され、会社の態度が注目されている。

遺族問題を取組む

各職場新聞が記事に

遺族闘争への職場の関心の度合いを示すように、各職場新聞がこの問題を共通的に取りあげたのが注目され、今後が期待される。

みいけ〝新年文芸〟を募集

本紙ではただ今、新年文芸を募集しております。みんなで原稿を書き合って、ぜひみんなの手づくりの〝みいけ〟新年号を世に贈りたいものです。

次の募集要領を参考にしていただき、どしどし寄せてくださいますようにお願いします。

×

小説・随筆・コントなど　いずれも四千字以内に。随筆にコントは、短いほどよい。題は自由。一人それぞれ一篇以内。

詩・短歌・俳句・川柳　題自由。一人三首以内。

職場・家庭からの手記　字数四千字以内。題自由。一人一篇。

姿見　字数五百字以内。主婦に限り一人一篇。

写真絵・マンガ　題自由　必ず白黒で。一人各三部以内

子供の作文　題自由。字数など問わぬ。一人一篇以内。学年、父親名を明記のこと。

その他　締切り十二月十五日また作品参加全員に、薄謝進呈。

×

なおこの募集は、三池労組とその家族のほか、三池退職者の会会員や原告団団員、三池新労組員、全国のCO患者守る会会員とその家族の皆さんも含めておりますから、どうかご遠慮なく原稿をお寄せくださることを心から願ってやみません。

――編集部

炭労が創立記念作品を募集中です

このほど、炭労中央から、創立三十周年を記念して、炭労のシンボルマークと小論文を募集するとの知らせがきました。

シンボルマーク

シンボルマークはバッチで三十周年を機に、現在活用しているものを刷新し、炭鉱労働者がだれでも親しめ、常時洋服の襟章として愛用できるバッチを希望しています。その大きさは、十センチ×十センチで、色彩は問わず、ハガキに描いてもよいそうです。

小論文

小論文の方は、今後の石炭産業の展望などを中心課題とするもので、字数は四千字以内とされています。

その他のこと

応募資格は、炭労傘下各支部の組合員と家族。

締切りは、十二月二十五日まで。作品発表は、来年の一月末。入選作品はそれぞれ一点とし、炭労中央執行委員長賞として、賞金五万円を贈る。

注意事項としては、所属支部、氏名、年齢、住所、職場名を明記すること。

送り先は、炭労本部事務局（東京都中野区中央三丁目九―二）あてに。応募作品は、返さないそうです。